

### 第3回 新しい工業高校の整備候補地選定委員会 会議概要

- 1 日 時 平成25年9月24日 火曜日  
開会 14時00分 閉会 16時05分
- 2 場 所 京都市立洛陽工業高等学校 1階会議室
- 3 出席委員 松重和美 委員(座長), 岡野哲也 委員, 尾河清二 委員, 信部尚平 委員,  
福本早苗 委員, 前野芳子 委員, 村上英明 委員, 室保次 委員  
(オブザーバー) 恩田徹 洛陽工業高校校長, 西田秀行 伏見工業高校校長
- 4 傍 聴 者 8人
- 5 主な次第 (1) 第1回委員会(会議)及び第2回委員会(視察)の内容確認  
(2) 事務局説明  
(3) 質疑応答・協議
- 6 議事の概要  
(1) 第1回委員会(会議)及び第2回委員会(視察)の内容確認  
  
(2) 事務局の説明  
「新しい工業高校の再編に係る校舎等整備比較資料」について  
・1ページ目は、候補地となっている洛陽工業・伏見工業・立命館中高の位置関係、電車、バス等の交通機関を示している。  
  
・2ページ目は、「3候補地の立地評価」についてまとめている。住所、敷地面積、学校履歴、まちづくり動向、防災計画の位置づけ、交通条件、生徒の交通手段、仮に各校のグラウンドが使用できなくなる場合の代替地の有無、借地等の権利関係について記載している。とりわけ、防災計画上の位置づけについては3校とも指定避難所となっているが、伏見工業おける収容人数が462人と少数であるのは、龍谷大学の収容が大規模のためである。  
・交通条件については、JR利用と本数の安定している市バスがある洛陽工業、京阪、JR、地下鉄の利用が可能で本数が安定している伏見工業、実質的に京阪、JRの利用となる立命館中高となっている。洛陽・伏見に比べて立命館は駅からの距離は長い状況。  
・生徒の通学実態については、洛陽は約6割が自転車、JRを主体とした公共交通機関利用者が約4割、伏見は約6割が京阪、JRなど公共交通機関、自転車が35%、立命館は94%がJRと京阪電車という状況である。

- ・代替グラウンドについては3校とも半径500m圏内での確保は難しい状況である。
  - ・なお、立命館については校地内に7,700㎡あまりの借地、JR沿線の通学路600㎡の借地がある。
- 
- ・3ページ目は「3校の敷地・建物評価」である。まず3校の配置図について、ピンク色は耐震改修が必要な建物、青色は耐震改修が不要な建物である。洛陽・伏見はほぼピンク色であるが、立命館は青色、つまり耐震改修は不要である。
  - ・また都市計画等の制限について、洛陽・伏見はともに第1種住居地域であるが、洛陽工業については埋蔵文化財を包蔵している。立命館は開発行為が制限される市街化調整区域かつ第2種風致地区である。
  - ・生徒が利用する教室面積等は表のとおりであるが、立命館は普通科の中学・高校であるため、普通教室面積の割合は高くなるが、特別教室・実習室へ転用も可能な部屋も多数ある。
  - ・また、洛陽の敷地面積が最も小さく、伏見・立命館は十分な広さを有していると言える。洛陽・伏見はほぼ建替えが必要となる。立命館は一定規模の緑地確保が必要となるとともに、敷地高低差に配慮し、バリアフリー工事が必要な状況である。
- 
- ・4～6ページ目については、「3校の具体的な整備計画検討案」となっており、現段階で考え得る整備方法の7案を示したものである。それぞれの案について、メリット・デメリットも含め、完成時のゾーニング、整備費用、工事期間、生徒への影響等についてまとめている。
- 
- ・4ページ目に洛陽の整備パターン3案、5ページ目に伏見の整備パターン3案を示しているが、両校の整備方法に関する考え方は共通している。
  - ・なお、洛陽については埋蔵文化財を包蔵しているため調査が必要であり、整備面積によって工事期間の長さの違いはあるが、伏見より工期が長くなる。また、ラグビー場は競技の可否も想定しておくことが必要と考え、参考まで明記している。
  - ・まず、現在のグラウンドに新しい校舎を建てておき、その校舎が完成した後、古い校舎を解体してその部分をグラウンドにするという考え方が、洛陽の場合はA案、伏見の場合はD案である。
  - ・ただし、この案の場合はグラウンドを使用できない時期が生じ、また代替グラウンドが近隣にはないため、仮に洛陽の場合は伏見のグラウンド、伏見の場合は洛陽のグラウンドを共有せざるを得ず、そうなる移動のためのシャトルバス運行も必要となる。どちらの場合も生徒を在籍させながらの大規模工事となるため、車両の出入り、騒音等による教育活動への影響は大きく、想定される工事期間では、卒業まで新校舎を経験できない生徒が生じることも考えられる。

- ・次に、洛陽の C 案と伏見の F 案の 2 案については、洛陽もしくは伏見の生徒をいったん別の場所に移転させて、不在期間に工事を行う案である。整備期間を早めるとともに、工事による生徒の教育活動への影響が生じないというメリットがある。
- ・しかし、洛陽の生徒を伏見へ、もしくは伏見の生徒を洛陽に仮に移転させたとしても、それぞれの校舎・敷地で 2 校分の教育活動（授業、部活動、学校行事等）を行うことは実質的には不可能と考えられ、結果として仮移転中の生徒たちの教育活動は十分に保障できないため採用は困難である。
- ・続いて、洛陽の B 案、伏見の E 案は、プレハブ校舎と既存実習棟を効率的に活用して、新校舎を整備する案である。グラウンドの一部分にプレハブ校舎を整備して生徒を収容のうえ、これまでの実習棟を使用しつつ、空いた建物を解体して建築していくという案である。
- ・新しい校舎が完成した段階で生徒をプレハブから新校舎へ戻し、プレハブと古い実習棟を撤去するという考え方である。
- ・ただし、A 案や D 案と同様に、生徒たちの教育活動への影響が大変大きいことと、洛陽についてはグラウンドが二分されるというデメリットも生じる。
- ・以上が洛陽・伏見工業の 2 校の整備案であり、工程は最長で A 案の 49 ヶ月（4 年弱）から最短で伏見の D 案の 30 ヶ月（2 年半）、経費については、最高で洛陽の C 案の 96 億円から伏見の D 案の 72 億円までとなっている。
- ・最後に、6 ページ目に記載している G 案が立命館の整備案である。立命館については校舎の改修（美装工事を含む）、グラウンドの整備費、バリアフリー化工事、古くなった空調更新費を想定した。現段階で購入費用を算出することが困難なため整備費 23 億円を掲載している。取得ということになれば、この費用に購入費を上積みすることになる。
- ・この案の場合は、現在の立命館中高が長岡京市の新キャンパスへ移った後に、洛陽・伏見の生徒たちに影響を与えることなく再整備を進めることができ、かつ工事期間も 10 ヶ月と最短で実施できるのが最大のメリットである。

#### 立命館中学・高等学校についての質問事項について

- ・これまで委員の先生方からの質問に対する立命館中学・高等学校からの回答内容について説明。
- ・「1 過去 3 年間の年間維持管理費」は、2010～2012 年度までの年間の維持管理費と修繕費、修繕費について回答いただいた。
- ・修繕費は、年度で幅があるが 130 万円～150 万円。

- ・清掃費，施設警備業務，施設設備保守等を管理会社へ委託するという私学ならではの運営が行われているため，それだけで 5,500 万円程度。
  - ・樹木伐採費が 90 万円程度。
  - ・借地料は 1,158 万円。
  - ・光熱水費は電気，ガス，水道合わせて 5,400 万円程度。
- ・「2 大型バスの状況」について，周辺道路が狭く進入は困難であり，必要な場合は龍谷大学付近へ停車し，徒歩で乗車しているとのこと。
- ・「3 地域住民からの苦情・要望・保護者の声」については，地域住民からは，生徒の声や通行方法を巡る苦情，保護者からは車両通行を懸念する声があるとのこと。また隣接者と共同使用している西門付近通行にあたっての取決めやプライバシー対策を行っている。
- ・「4 長岡京への移転経過・理由」については，小中高一貫教育の展開のために必要な施設を確保する必要が生じたとの回答。さらに，ホームページにおいては，通学圏を京都エリアから関西エリアに拡大すること，立命館大学（草津，衣笠，大阪茨木）との連携の地理的優位性を活かした高大連携を図ることが記載されている。
- ・「5 学校施設使用上の課題について」は特になし。「6 生徒の交通手段」については，中高あわせて京阪深草駅から 800 人，JR 稻荷駅から 800 人，自転車 30 人，徒歩 70 人。

(4) 委員からの主な意見，質疑応答（ は委員， はオブザーバー， は事務局）

単純に金額だけで考えると一番安価になるであろう立命館中高が最もよいのではないかと。工事中の間に，入学し卒業する生徒が出てくるといことは避けるべき最重要課題である。

単に旋盤で作業する等の技術だけでなく，環境と共存するための工業教育や市内の小中学校と連携し，ものづくり事業を実施するなど，夢のある新しい教育を展開するには，ある一定のキャパシティは必要であり，敷地が広い立命館は最適ではないかと。

洛陽または伏見で整備する場合，工事中は立命館中高を借りるということも考えられるのでは。

立命館中高は普通科高校であり，工事期間中のみ，間借りするとしても，工業高として活用するための改修が必要となり，立命館に返すときには原状復帰が通常は必要となってくるため，現実的ではないのではないかと。

現高校の敷地で全面建て替えが理想だが、限られた財源や資源があるなかで、我々としては教育委員会が決定したことについては受け入れ、今までできなかったことに積極的にチャレンジしていきたい。

この委員会の中で候補地を一つに絞ったとしても、立命館であれば買収に係る費用や跡地活用による収入など整備に必要な予算の確保できるかというのは別の問題であり、単に予算面だけではこの委員会の中で候補地を一つに絞れないので、予算以外の様々な要素を考慮していかないといけない。

伏見工業高同窓会でも立命館中高には独自に調査を行ったが、外壁や擁壁にひび割れやずれが確認され、危険度の高い地形、地盤だと思われる。また、国土地理院の都市圏断層図には花折れ活断層と推定断層帯に挟まれていることが示されており、安心・安全面から危険な場所と疑わざるを得ない。

活断層等の地形、地盤は建物にとって基本的な要素であり、工業高校将来構想委員会の「最終まとめ」にも「立地条件、交通の利便性、生徒の安心安全」について考慮して再編を検討する旨が示されているとおり、その安全性の担保は必要である。

立命館の地盤調査は、すぐに調査できるわけではなく時間も相当かかると思う。本格的な調査は厳しいかもしれないが、次回までにはわかる範囲で調べてほしい。

国土地理院の断層図は空中写真を判読して作成されたものであり、地層を掘って調査したものではない。できるだけ資料を調べて、次回の委員会に提出する。

立命館中高は交通の便が悪い。車の交通量も多く、ガードマンが配備され、教員も通学指導している。また、夜は人通り少なく危険である。生徒の自覚だけでは安全を確保することは難しい。地域の事情も考えて判断すべき。立命館中高は立命館大学に進学できるから生徒が来るが、工業高校では生徒獲得は望めない。

洛北中は通学圏が広く、6小学校の区域から通学している。電車やバスを利用、また徒歩で25分かけて通学している生徒もいる。今では少なくなったが、以前、学校が荒れているときは通学の苦情も多かった。その際、生徒指導を徹底することにはもちろんだが、最終的には自身の地域の子どもということの説明し理解をいただくように努めていた。今の立命館の生徒は他府県からも通学しているが、京都市立の工業高校ということになれば、互いに地域のために共存を図っていくことができるのではないか。

比較検討資料に記載されている整備案の中で、新築面積について洛陽が20,500㎡、伏見が18,000㎡であり違いがあるのはなぜなのか。

洛陽・伏見とも活用可能な既存建物を含めて、22,000㎡の整備計画としており、活用可能な既存建物の面積が洛陽・伏見でそれぞれ違っているので、新築面積に差が出ている。

やはり生徒の教育活動に支障のないようするためにはプレハブは是非避けたい。西京高校の建替えの際に、4年間プレハブを使用したがる、クーラーが使えない、また防音壁はあったが、授業も聞き取りにくかったなど、非常に不便だった。入試選抜制度が変わる中で、より選ばれる学校として生き残っていくためには、プレハブ校舎で教育活動を行うということは特に生徒の印象はよくない。

生徒の安全確保のためには、立命館については専門家の調査等が必要だと思うが、安全性が確認できれば、立命館が最も望ましい。工事中における生徒の教育活動に支障のないようにしないといけないことが非常に重要。3、4年間工事をしながらの校内で充実した教育が果たしてできるのか。教育の中身がとて重要であり、スピード感を持って再編を進めてほしい。

洛陽と伏見では整備に時間が掛かりすぎである。工事中に入学し、卒業する生徒がいるということは考えたくない。1日でも早く新しい教育を始めるため、早く結論を出すべき。幸いにも立命館の移転期と重なり、候補地として挙がってきており、後は未定の買収費用を含めた財政面を比較した上で立命館について検討すべきではないか。

未定の立命館の買収額については、たとえ試算や見込の金額であったとしても、外部に一度情報発信するとその数字が一人歩きする可能性があるため、慎重に判断すべきである。

洛陽・伏見は、現校舎で教育活動を行いながらの計画であり、工期・費用も相当要するため、整備は非常に難しい。さらに、洛陽は埋文調査が必要となる。また遺跡が出てきたら計画自体なくなる可能性もあり、両校で比較すると伏見ではないか。

議論を進めるためにも、伏見と立命館に絞って検討するべき。伏見も仮設校舎を建てる等の方法により概ね3年を要するため、工期・費用面で言えば立命館がよいのでは。ただし、立命館の安全性は確認すべき。

もし立命館で行うなら、両校を跡地活用や売却する場合の収入について試算できるのであれば、それらの収入も合わせて、総合的に判断するも必要ではないか。

「新しい工業高校」は、単に1つに統合する訳ではない。教育内容については、現在、両校の教員も交えて教育委員会と議論しているところである。地域・産業界とも連携して、今後の工業教育にふさわしい学校をつくっていきたい。どの候補地で整備することになっても、その地でよかったなと生徒に喜んでもらえるような学校にしたいと考えている。

今回は、信部委員から指摘のあった立命館に関する事項、特に地盤の安全性について事務局で調査し、その内容について説明していただきたい。また、本日指摘があった事項については、事務局で整理した資料を作成して頂き、次回ではそれらを元に改

めて審議し，委員会としての最終の判断に向けて議論をしていきたい。

( 5 ) 閉会

16時05分，座長が閉会を宣告。